

平成二十八年度第二十九回夕暮祭短歌大会入賞歌

秦野市長賞

図書館の静寂の中に身をかがめ手話の手小さく若きカップル

秦野市教育委員会教育長賞

満開のはだのさくらみちたそがれを介護事業の車が走る

秦野短歌会会長賞

廃校の前に待ちゐし児らを乗せスクールバスはまちへと向かふ

村岡嘉子選者賞

冬枯れの雑木林に昇りくる朝日に抱かれる私も一樹

山田吉郎選者賞

一途にも囀る大瑠璃の澄める声耳に納めて大山を下る

佳作

ラケットをいたいぐらいにぎりしめサーブの「カット！」という音を待つ

子も孫もページ捲りし百科辞書廃校の書架に眠るがに並ぶ

雑草のにおいの残るTシャツを疲れもろとも脱ぎ捨てる夏

子の息の足らぬふうせん母が足しポンポン打ち合う声がはじける

青春はロシアンティーの如きもの僕の世界に君というジャム

花吹雪纏ひて弘法山にあり富士に真向かふ夕暮の歌碑

町中に土壁建て家残りゐて葉たばこ詠まるる「夕暮」の歌碑

手を入れよ膝は伸ばせと事毎に臥したる吾へ夫が氣遣ふ

アルバイト終へし巫女らの声あかるく袴を畳む社務所の小窓

魂のうねりにまかす夫となり静かに長し点滴の日々

母はフサ祖母はフサヨと仲もよし唐棣の壺に並びて眠る

里山を守らんとしてポランテアに行きたる娘秦野に嫁せり

雪国の雪より白き雪柳光なき眼に映るを待たむ

明日よりスウェーデンだと我が息子ちよつと其処らへ行くごとく言う

熟れ柿のような夕日が待つ坂を心のタツプ踏みながらゆく

自らの影に着地をするように春の空より鳩は降りくる

濃く淡くもやのかかりてをちこちにこぶし浮きたつ「風の吊り橋」

代掻きの隣りを歩む鷺のいて時折農婦はスマホ操る

抑留死亡者の名前四九六四人紙面を埋めてカタカナの文字

交換の上り列車を待つしばしさくら見てをり若き車掌は

静岡県静岡市

今井 克己

神奈川県秦野市

鳥居 滝子

北海道札幌市

藤林 正則

山梨県北杜市

小澤 千鶴子

神奈川県愛川町

松澤 昭子

アメリカワシントンDC

浅野 もみじ

京都府南丹市

中川 文和

神奈川県秦野市

大木 和弘

神奈川県秦野市

柳川 維

東京都足立区

佐藤 まどか

神奈川県秦野市

澤井 義子

神奈川県横浜市

伊東 光江

神奈川県伊勢原市

小林 啓子

愛知県名古屋市中

清水 良郎

神奈川県秦野市

白石 三恵

千葉県市川市

山本 明

長崎県長崎市

西 史紀

新潟県新潟市

佐藤 憲

千葉県市原市

富岡 光江

東京都品川区

高橋 よしえ

京都府京都市

後藤 正樹

神奈川県横浜市

石田 恵美子

千葉県千葉市

安井 三緒

神奈川県秦野市

石原 次子

神奈川県秦野市

細井 誠治